

マルセル・ブルーストの作品における
動物表象についての総合的研究

松 田 真 里

目次

序論	p. 6
----	------

第一部 『失われた時を求めて』以前の作品群および書簡における動物表象

第1章 初期作品から中後期作品における動物表象	p. 23
-------------------------	-------

第一節『楽しみと日々』における動物表象	p. 24
---------------------	-------

1. 箱舟の鳩 p.26
2. 「シルヴァニー子爵バルダサール・シルヴァンドの死」と動物 p. 27
3. 「若い娘の告白」と動物 p.30
4. 「嫉妬の果て」と動物 p.32
5. 「つれない男」と動物 p.35

第二節『ジャン・サントウイユ』における動物表象	p. 39
-------------------------	-------

1. 動物表象の特徴 p.41
2. カモメ p.44
3. ボア p.47
4. ハエ・毛虫 p.50

第三節『サント・ブーヴに反駁する』『ロベールと子山羊』における動物表象	p. 54
-------------------------------------	-------

第2章 初期美術評「シャルダンとレンブラント」における動物表象	p. 58
---------------------------------	-------

1. シャルダンの絵画における動物 p. 60
2. 動物画家としてのシャルダン—存在そのものへ p. 64
3. ゴンクール兄弟のシャルダン評 p. 67
4. 『失われた時を求めて』における芸術家の視線 p. 75

第3章 書簡における動物表象	p. 76
----------------	-------

1. レーナルド・アーンへの書簡（アーンの『日記』含む） p.77
2. アーン以外への手紙における動物表象 p.82
3. 芸術家としての自己像 p.84

第二部 プルーストの作品における動物表象とその時代背景

第4章 プルーストの作品群と博物学（パリの動物園・水族館・博覧会）	p.89
1. 「順化自然観察公園」における動物表象	p.94
2. 野外社交会としての動物園	p.97
3. 動物園や水族館の比喻を通じた人物の戯画	p. 99
第5章 プルーストの作品群と動物愛護および教育	p. 112
第一節 動物愛護・生体解剖反対運動	p. 112
1. プルーストと動物愛護とその心性	p. 112
2. ベル・エポック期の新しい女性たちの動物愛護への身振りと言刺さ（ポトッカ伯爵夫人を中心に）	p.123
3. ラシエルの動物愛護	p. 126
第二節 第三共和制期の学校教育 ラ・フォンテーヌ『寓話』を中心に	P. 143
1. ラ・フォンテーヌと学校教育 文学についての逡巡	p. 148
2. サロンにおける『寓話』の引用・暗示-第三共和政期の寓話受容	p. 155
3. プルースト家における寓話受容-母と子の記憶	p. 161
4. ラシエルの朗誦に見る新しい文芸創造	p. 168

第三部 『失われた時を求めて』における動物表象のモノグラフィ

第6章 動物のテーマ批評	p. 173
第一節 鳥のテーマ批評 — 鳥と小説創造	p. 176
1. 孔雀の表象と小説創造の発展	p. 181
2. ゲルマント一族に見られる貴族性と鳥の表象	p. 187
3. アルキエオネの巣（不安と悲しみからの快癒）	p.190
4. 冬の部屋と夏の部屋に現れる鳥の巣	p. 193
5. 天上の花壇に見られるプルースト的美学	p. 195

第二節 牛のテーマ批評 — ラン大聖堂の「牛の夢想」をめぐって.....	p. 199
1. 既存の象徴体系から作家独自の比喻へ	p. 199
2. 初期作品における「牛の夢想」—牧歌的風景と絵画芸術を通して	p.200
3. ラン大聖堂の描写における「牛の夢想」	p. 202
第三節 馬のテーマ批評 — 黙示録の馬をめぐって	p. 209
1. プルーストの実人生及び作品における馬と死のテーマ	p.209
2. 幻灯におけるゴロの馬	p.204
3. 草稿における書き込み	p.216
4. 「黙示録の馬」という加筆の解釈の可能性—馬の揺れと文学創造	p.220
4-1 サン＝ルーと馬をめぐって	p. 220
4-2 幻灯の場面における幻想と神秘性の強調	p. 222
第7章 プルーストの小説美学と動物表象	p. 226
第一節 目立たない動物	p. 226
第二節 風刺	p. 235
第三節 神話の書き換え	p. 245
1. 風景に現れるライオンの比喻	p. 246
2. 神話世界へと変容する動物園	p. 248
3. 祖母の病と死における動物	p. 250
4. プルーストの変身譚	p. 254
結論	p. 256
参考文献	p. 267
図版	

論文要旨

プルーストの作品には多くの動物の比喩が存在する。『失われた時を求めて』だけでも、150種類を超える動物名が登場しており、初期作品から後期に至るまでの作品群には、大型の哺乳動物から、鳥類、魚類、昆虫、両生類、そして文学表象としての伝統を持たないような原生動物、ポリープ、菌類など多岐にわたる生物が現れる。

これまでプルーストの作品において、植物については多くのことが言われてきたが、動物については十分に言及されてこなかった。とはいえ、近年、とりわけフランス思想における動物性への関心の高まりと並行して、文学における動物の研究が注目される中で、プルーストの作品においても動物表象が論じられている。とりわけアンヌ・シモンは、プルーストに限定されない文学や思想における広い領域から、動物研究の大規模なプロジェクトを立ち上げ、その成果がすでに発表されている。そのような現状において、本論文では、先行研究では強調されてこなかった初期作品における動物表象にも目を向け詳細に検討していく。プルーストのテキストを文化社会史の文脈から捉える試みも重視し、最後はプルーストの動物表象のモノグラフィを設け、総合的に作家の動物表象を検討する。

第一部で扱うのは、動物そのものの登場回数が多い『楽しみと日々』『ジャン・サントゥイユ』を始めとする初期の作品群である。これらの作品において、動物は比喩の中に現れるよりも、存在そのものが描かれ、登場人物と調和した関係が築かれている。さらに身体的であり、生命力を喚起する場面において動物が多く登場している。吉田城は『ジャン・サントゥイユ』で理想的だったものが『失われた時を求めて』では価値を失うと述べているが、『失われた時を求めて』へ至るまでの中後期の作品群、評論や書簡において、動物がどのように表象されているかを論じる。(第一部 第1章)。1895年に執筆が推定される絵画評「シャルダンとレンブラント」は、プルーストの青年期に書かれ、のちの小説美学の萌芽となる未完の書である。シャルダンの静物画に描かれた、犬や猫、エイやカキなどの動物には作者の思いが仮託されている。プルーストと同時代に活躍したゴンクールはこのような描き方をしておらず、作家独自の視点が見られる。『失われた時を求めて』において、再びこの絵画評の文章が挿入される場面で動物は消失しているがその理由は何か。(第一部 第2章)。プルーストの友人や知人に宛てた書簡には多くの動物表象が現れる。最も知られるのは、プルーストが親交を深めた音楽家レーナルド・アーンの犬ザディーグに対して共感を語り、アーンに観念的な意味における「犬」に対して語る手紙である。この時期のアーンへの書簡には、無数の隠語や、プルーストによる動物の素描画も現れている。プルーストが自分自身を語る際に登場させた動物についても取り上げ検討する(第一部 第3章)。

第二部では、文化社会的な立場から作品を外側から検討する。プルーストが生きた時代の動物園など文化施設、「馴化自然公園」、パリ植物園「ジャルダン・デ・プラント」(動物園「ラ・メナジュリー」併設)、「自然史博物館」、1900年パリ万博開催を期に造られたシャン・ド・マルス地下の水族館などと作品との関係を分析していく。プルーストは、オペラ座やバルベックのレストランなど異なる社会階層が集まる集合的な場を描く際に動物表象を登場させ、対象と距離を取りながら、滑稽に描き出している(第二部 第4章)。

近年のプルースト研究で顕著なのは、作品を同時代のさまざまな文脈で捉え直すことであるが、19世紀半ば以降ヨーロッパで隆盛する動物愛護・生体解剖反対運動の動向について、先行研究では十分に指摘されていない。初期作品から愛玩動物をはじめ動物への愛着は随所に描かれ、実際、プルーストは1922年8月、ギュスターヴ・トランシュに宛て、批評

家ポール・レオトーの猫に関する書評について手紙を書き、同時代の作家コレットの作品に感化され自分も猫が飼いたいと述べている。『花咲く乙女たちのかげに』では、サン＝ルーの愛人で、ユダヤ人で元娼婦の女優ラシエルが小さな動物を片時も離さず愛護する。流行に飛びつくなど軽薄な面があるとともに、動物愛護についてサン＝ルーに教え諭す教育的な一面が見られる。ブルーストは早くから動物愛護に興じる女性たちに関心を向け、1904年の時評では田舎へと移り住み動物の世話に専心するポトツカ伯爵夫人の姿を滑稽に描いていた。進歩的な意識を持つ女性たちは実在し、『ジャン・サントウイユ』にはサントウイユ夫人の周りの進歩的な女性たちが、ソルボンヌ大学の特別授業、解剖学の授業を聴講する様子が描かれ、『ゲルマントの方』においてはマルサント夫人が、ソルボンヌ大学のブリュヌチエールの授業に出席していた。進歩的な女性たちの意識に芽生える動物愛護の教育的な精神に着目する。さらにラシエルと不可分であるユダヤ性と動物愛護との関係、ラシエルを取り巻く同時代の知識人の存在や思想的な背景へと問題を発展させながら、作品を読み解く(第二部 第5章1)。

ブルーストは、ラシーヌやセヴィニエ夫人といった17世紀古典文学に親しみ、作品や書簡において多くの引用をしているが、ラ・フォンテーヌとブルーストの作品との関係について、これまで詳しく論じられてこなかった。ラ・フォンテーヌ『寓話』は、第三共和政期の学校教育においてとりわけ価値を持ち、普仏戦争を経てさまざまな新しい文化政策を試みるフランスにとって、重要な作品と考えられた。ジュール・フェリー政策など新教育制度では、『寓話』は暗誦という学習方法を通して教育の場で用いられ、その影響は『失われた時を求めて』の登場人物の引用や暗示からも読み取れる。ブルーストの生きた時代に動物文学が教育の場で用いられることがあったように『寓話』に描かれる動物も、ブルーストの作品において意味づけられている。ゲルマント夫人やカンブルメール氏のサロンでの『寓話』受容と、シャルリュスやラシエルを通して描かれるそれとは性質が異なること、前者では教育の場で進んで使用された『寓話』第一選集のものが多いのに対し、後者ではブルースト家で愛された第二選集の「二羽のハト」や「二人の友」であることなども異なる。こうした様々な受容の詳細を描くことで、ブルースト自身の文学的な問いが重ねられた可能性を論じる(第二部 第5章2)。

第三部では、『失われた時を求めて』を中心にブルーストの動物表象がどのように展開されていくのかを論じる。作品内に150種類を超える動物の中で頻度の高い動物、鳥、牛、馬を取り上げる。多様な意味を担うブルーストの動物表象に一貫した意味を見出すことは困難だが、個別の動物表象における作家独自の視点を浮かび上がらせたい。まず「鳥」はブルーストの作品に最も多く登場し、作品の重要な場面にも関わっている。クジャクやハトなど主人公の愛の問題や小説創造に関わる鳥の表象について検討する(第三部 第6章1)。次に「牛」は、神話をはじめ古典文学にも多く描かれてきた象徴性の高い動物であるが、ブルーストは、それを踏まえつつ独自の比喩を生み出している。登場人物の滑稽な側面を表すこともあるが、『失われた時を求めて』第三篇『ゲルマントの方』の描写文に突如現れるラン大聖堂に配置された牛の彫像に着目する。ここで牛は夢想しているように見えると描かれ、作家の思いが込められている。「牛の夢想」は、初期作品から繰り返し描かれていた。この描写文の決定稿へ至る執筆過程では、「ノアの箱舟」の比喩や、村上祐二の指摘にあるように「血の洪水」の加筆が見られ、ブルーストが政治的な意図を含め、平和への希求を重ねながら執筆したことが窺える(第三部 第6章2)。最後にブルーストの作品に多く登場する「馬」

は、プルーストの自伝的な問題と関係し、初期から後期の作品に至るまで死のイメージと不可分である。マリ・ミゲ＝オラニエが馬について詳細に論じているが、『失われた時を求めて』の幻燈の場面に現れた「ゴロの馬」には言及していない。この草稿には、「黙示録の馬 (cheval d'Apocalypse)」という加筆が、挿入箇所を示す強調記号を記され消去されている (Cahier 9, fol. 26, recto)。プルーストはある時期においてゴロの馬に黙示録の馬のイメージを重ねていたことが考えられる。決定稿では削除されるものの、この語があったからこそ生まれる解釈の可能性を探り、作品全体に広がりある読解を見出す (第三部 第6章3)。

1919年にゴンクール賞を受賞したのちプルーストは、書簡においては三度『失われた時を求めて』においては二度も、ラ・フォンテーヌ『寓話』「ハトとアリ」から「別の例はより小さな動物から引き出された/清らかな小川に沿って、ハトは喉を潤した/水の上にかしづいたアリは、水の中に落ちた」という詩句を引用している。プルーストの作品には、バルザックらの作品に多く現れるような哺乳動物ばかりではなく、トンボ、オタマジャクシ、ヒル、サンショウウオ、マルハナバチなど、目立たない生物が多く登場する。「コナダニやカエルのイメージは、非常に興味深く深遠なものであるのだ」と書簡で書くプルーストは、作品の随所に目立たない生き物を登場させ、人間中心主義を揺るがす世界の捉え方の転換として捉えていたことが窺われる (第三部 第7章1)。ソフィー・デュヴァルやイザベル・ド・ヴァンドゥーヴルの研究に見られるように、プルーストの作品において動物の比喩は「皮肉」や「蔑視」の意味を持つ。たとえば『失われた時を求めて』の登場人物でユダヤ人のブロックにハイエナの比喩が現れるように、どのように動物表象が人物を風刺しているのかを明らかにする (第三部 第7章2)。ミゲ＝オラニエが「プルーストのあらゆる作品は、オヴィディウスのように『変身物語』というタイトルをつけることが可能」と述べているように『スワン家の方へ』においては、ブーローニュの森に、数多の動物が住まう神話的な世界を見出し、『花咲く乙女たちのかげに』に描かれるバルベックの海には、広がる波の斜面にサーカスや穏やかに暴れるライオンを見出し、現実の光景を変容させている。『ゲルマントの方』の祖母の病の苦しみや強い生命を描く場面において、馬、タコ、サラマンダー、ピュトン、ヒルなどの動物を登場させ、ギリシャ神話などの意味を重ねつつそれとは異なる独自の比喩を生み出している。死に至る祖母に見出される「獣 (bête)」のイメージは、人間の起源への回帰が描かれているようにも考えられる。プルーストの作品における動物表象は、既存の象徴体系に独自のイメージを加え変容したものや、アンヌ・シモンの述べるように「交配的な」表象となっていることに注目する (第三部 第7章3)。

このような分析を経て、先行研究では論じられていない点を含め、初期作品に立ち返って検討し、『失われた時を求めて』においては動物表象に変容が見られることを方向づけ、総合的な研究への補完を目指した。